

リハビリテーション科学領域 種村 留美 教授が、 日本作業療法士協会より「特別表彰」を受賞されました。

2020年7月27日



今年度、特別表彰を受賞されたのは種村留美氏(会員番号 815、神戸大学大学院保健学研究科教授)である。「表彰規程」によれば、特別表彰とは「日本作業療法士協会もしくはわが国の作業療法の発展に特筆すべき業績をもって著しく寄与した者の表彰」であり、都道府県士会からの推薦を受け、表彰審査会にて厳正な審査を経て理学会で審議・決定されている。種村氏は高次脳機能障害の作業療法に長年にわたり積極的に取り組み、研究、学会運営、執筆活動等により当該分野の学術的発展に大きく寄与した功績が高く評価された。

受賞者のことば 種村留美

このたびは、特別表彰受賞に際しまして、日本作業療法士協会およびこれまで共に支えていただきましたととても多くの皆様に、心より感謝申し上げます。

協会には、学術誌の編集委員や研修会講師など携わらせていただきましたが、この賞を契機に、ますます貢献せねばという思いを強くしております。

振り返ってみれば、作業療法士になって40年の歳月が経ってしまったわけですが、その半分が臨床、半分が教育という作業療法士人生となりました。臨床での作業療法でも、まだまだ患者様から学ぶべきことを多く残したまま、大学院への進学、その後教職の道に入ったわけですが、いわゆる「作業療法専攻の先生」としては、いつ学生に臨床を満身に伝えられるようになるのだろうと、自問自答しつつ今日に至っており、未熟なままです。

私がこれまでに専門としたところは、「高次脳機能障害作業療法」ですが、作業療法士になりたての頃、研修会であるドクターに、「高次脳機能障害は、本当は医師がやるべきだが、時間が無いから他の職種がやっているが、知識のない職種が診るのは賛成できない」と言われたことを思い出します。それならば、知識を積みよのいな、と、当時それほど高次脳機能障害に関する和書は多くなかったので読み終え、英文雑誌も自分が担当した患者様に関する論文を探して読んでいました。今では優れた教科書がたくさんあり、学びには良い環境となったと思います。

また、多くのことを、患者様の語りや行為から学びました。小倉、伊豆、岡山、京都、神戸と渡り歩きましたが、行く先々で、臨床で関わらせていただいた患者様から、今でも近況報告をいただき、その都度に、喜び、哀しみ、また勇気をいただいています。

教え子たちの活躍もまたしかり、です。最近ではSNSで知ることもできて、便利な世の中になったなあと思っています。

まだまだ作業療法士としてイケると思っていますので(笑)、残りの作業療法士人生、協会に貢献しつつ、高次脳機能障害作業療法の伝達を精進してまいりたいと思います。

本当にありがとうございました。



種村 留美 (たねむら るみ)

2004年、広島大学大学院医学系研究科博士後期課程保健学専攻修了、博士(保健学)。

1980年、作業療法士免許取得。以後、おさゆきリハビリテーション病院、伊豆山福泉病院、京都大学医学部保健学科(旧京都大学医療技術短期大学部)を経て、2007年より神戸大学大学院保健学研究科教授、現在に至る。2019年より同研究科副研究科長。

日本作業療法士協会学術誌編集委員をはじめ協会や士会の各種委員会の委員のほか、高次脳機能障害作業療法研究会代表、日本高次脳機能障害学会理事、文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員等も歴任。

著書:『理学療法・作業療法テキスト 運動学実習』(共編著)、『臨床フィールドガイド(第2版)』(共著)、『作業療法学全書(改訂第3版)第8巻:高次脳機能障害』(共著)ほか、高次脳機能障害関連を中心に論文・著書多数。